特別講演

森林と薬草　－自然との共生―

株式会社和漢薬研究所
取締役企画渉外部長　岩田（いわた）　尚登（ひさと）

略歴紹介
昭和５５年３月　明治薬科大学　卒
（薬剤師免許取得）
昭和５５年４月　群馬県衛生公害研究所臨時職員
昭和５５年７月　株式会社和漢薬研究所入社
平成　９年７月　医学博士号取得（医博乙第 1121 号）
（群馬大学生体調節研究所）
平成１９年９月　（一財）日本森林林業振興会　理事
平成２４年４月　（公財）国際緑化推進センター　理事
平成２７年７月　株式会社和漢薬研究所
取締役企画渉外部長
現在に至る

１．漢方の歴史

（明治維新後の医療政策）

㈱和漢薬研究所の設立を語る前に、漢方の歴史を紐解かせていただきます。江戸末期になると西洋医学の流入が始まり、明治以後の医療政策は西洋医学一辺倒になりました。1883 年（明治 16 年）に医師免許規則が定められ、西洋医学のみの教育が必須で、漢方医学の教育は必要とされませんでした。よって漢方医学は衰退の一途をたどることになり、西洋医学中心の時代が戦後まで続きました。しかし、漢方医学が全く途絶えてしまったわけではなく、1910 年（明治 43 年）和田啓十郎によって著された『医界の鉄椎』で、本書には西洋医学の不足な面を補う東洋医学の有用性が論じられており、当時の医学界に大きな反響を与えました。彼の主張に感銘を受けた湯本求真は『皇漢医学』を著し、漢方医学の有用性を主張しました。湯本求真を師事した大塚敬節（おおつかよしのり）らは協会を設立するなど、漢方医学復興の運動がさまざまな形で行われました。一方、このような西洋医学中心の医療政策においても、国民の身近な医療機関である薬局・薬種商は従来通り漢方薬を取り扱っており、国民医療に大きく寄与していました。

（漢方医学の復興）

戦後、1950 年（昭和 25 年）に日本東洋医学会が発足し、1972 年（昭和 47 年）には武見太郎、大塚敬節(おおつかよしのり)らの努力によって東洋医学の総合研究所である北里研究所東洋医学総合研究所が設立されました。一方、このころから、西洋薬の副作用が大きな問題として取り上げられ、国民の漢方に対する認識がさらに高まってまいりました。漢方製剤については、一般用漢方製剤 210 処方の承認内規が制定され、更に漢方エキス製剤が開発され、1976 年（昭和 51 年）には医療用漢方エキス製剤が大幅に医療保険薬として認められました。このような経緯を経て、漢方薬を取り扱う医師や薬剤師が増加して現在に至っています。

近代日本漢方略史

1868年	（明治１年）	明治維新（西洋化、富国強兵、西洋医学政策）
1883年	（明治16年）	「医師免許規則」公布
1895年	（明治28年）	国会にて医師国家試験は西洋医学のみ採用決定、漢方医学衰退
1910年	（明治43年）	和田啓十郎『医界の鉄椎』を著す
1927年	（昭和２年）	湯本求真『皇漢医学』を著す
1930年	（昭和５年）	大塚敬節（おおつかよしのり）は、湯本求真を師事するため、高知から上京
1934年	（昭和９年）	日本漢方医学会設立（『漢方と漢薬』発刊）
1938年	（昭和13年）	東亜医学協会設立（拓殖大学に「漢方医学講座」開講）
1950年	（昭和25年）	日本東洋医学会設立
1972年	（昭和47年）	北里研究所東洋医学総合研究所設立（初代所長：大塚敬節）
1974年	（昭和49年）	一般用漢方製剤210処方の承認内規制定
1976年	（昭和51年）	医療用漢方エキス製剤43処方保険適用
1991年	（平成３年）	日本東洋医学会が日本医学会加盟学会に認定される
2008年	（平成20年）	「医師免許規則」公布　「内科」「外科」などの診療科名との組み合わせで「漢方」の表示が認められる。

２．会社設立の経緯

株式会社和漢薬研究所（創立昭和４０年）・カポニー産業株式会社（創立昭和２３年）は、自然薬「松寿仙」を主製品として、動植物（生薬）を原料とする医薬品を製造そして販売をしている企業グループです。当社の製品が自然薬と呼ばれるのは、当企業グループの主製品である「松寿仙」、その原料であるクマザサ葉、アカマツ葉を森林から戴いているからです。この様に森林を中心とする豊かな自然の恵みをいただいていて生産活動を営む企業でありますことから、「自然の生命力を生かした自然薬をもって社会に貢献し、万人の健康に寄与しよう」を創業の精神としており、社員一人一人が自然を守る使命と責任を自覚し、その日々の業務に取り組むよう徹底した教育がなされています。

（自然薬が生まれた時代背景と企業運営）

自然薬の創始者（故横手一二前会長）は、当社の前身である太陽産業株式会社時代に（創立昭和 23 年 1 月 22 日）ＤＤＴを中心とする殺虫剤の販売に着手、元々「薬」に縁のある会社でしたが、昭和 29 年にクマザサの青汁製品を販売することに着手しました。

この頃重い病に臥せってしまい西洋医学的な治療や医薬品で治癒できなかった病が、このクマザサ製剤で回復できたことに大いに自信を深め、「人間には生まれ持って自然治癒力がある、そして、その自然治癒力を高めるには大自然の中に人類起源の昔より永遠のたくましい生命力を持ち続けて来たクマザサが一番である」という信念のもとにこの仕事に汗を流し、心身すべてを打ち込む決意をされたのです。

古い歴史のある漢方薬と現代医薬の中枢となっている化学薬の接点となる薬、即ち副作用のない薬、自然のものを主原料とした薬、科学的に効果を証明できる薬の研究・開発の発想から、当時東洋医学会の権威者である大塚敬節先生、矢数道明先生、山田光胤先生等の御意見を聞き、御賛同を得て昭和 40 年 10 月、株式会社和漢薬研究所を設立しました。

元々販売していたクマザサ製剤とは別の「松寿仙」を医薬品として販売するようになったのは昭和 44 年のことです。クマザサ葉の葉緑素にアカマツ葉エキス、ニンジンエキスを加える処方が完成しました。松寿仙だけでなく当社で製造販売している多くの製剤は、先程もお話した漢方の権威である大塚敬節先生やその愛弟子山田光胤先生達のご指導の下、開発されました。

自然の原料を当社独自の処方でバランス良く配合した「漢方薬でもない」、「化学薬でもない」、「副作用のない自然治癒力を高める薬」が『松寿仙』であり、これが「自然薬」であり、ここで初めて自然薬という言葉が生まれました。

３．自然の恵みから生まれた　松寿仙

私達の自然薬『松寿仙』は、滋養強壮剤です。この滋養強壮という言葉について明確な定義といったものはありません。厚生省ですら、その統一見解をもっていませんし、滋養強壮効果をどの様に証明するかも、滋養強壮剤と呼ばれる薬を作っている何十社かによって、それぞれ違います。

生体には『生体の恒常性維持機能』つまり、『自然治癒力』といったものが元々備わっています。病気にならない様にする力、病気になっても、早く元通りの健康な体に戻そうとする力です。病気になってしまっている人、或いは、体のあまり丈夫でないという人は、この自然治癒力が弱くなっていまっているわけです。

自然薬『松寿仙』は、細胞一つ一つを元気な状態に蘇らせ、この自然治癒力を高める、つまりは、滋養強壮効果を発揮します

松寿仙は、何故赤松葉とクマザサと人参が配合してあるのかという質問･指摘をよく受けます。生薬には、化学薬にはない生薬独特の特長がありまして、配合による相乗効果といったものが期待出来ます。単独では、つまり１種の生薬だけでは効果がみられないのに、他の生薬と混合（配合）すると、思わぬ効果が現れるといった事が、漢方薬などには沢山例があります。

松寿仙の主原料はクマザサの葉で、この葉から葉緑素を抽出します。松寿仙は松という字から始まりますので赤松葉の緑と誤解されますがクマザサ葉の緑です。

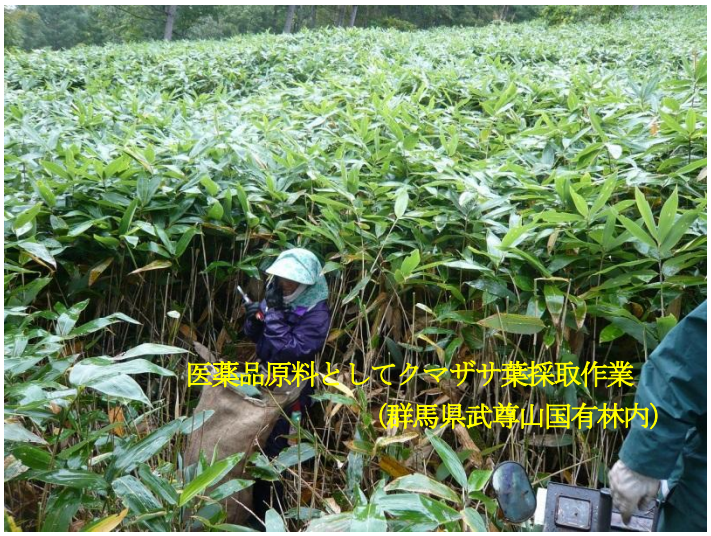
松寿仙の原料となる「クマザサ葉」は、青森県・秋田県・岩手県・長野県の山野に天然に自生するものだけを採取しています（平成28年９月現在）。採取地は主に「国有林」内ですが、現地の森林管理署の許可をいただいた場所で、然も農薬等が使われたことのない安全な地域を選定して居ります。安全・安心な場所での天然物の採取が『本物づくり自然薬』の原点です。クマザサ採取地のほとんどが標高1,000メートルを超える人里離れた山中であります。

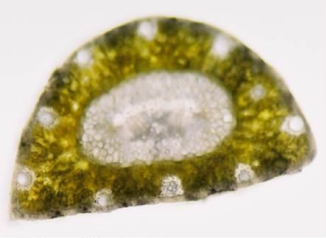
もう一つ、赤松葉エキスの配合ですが、以前から森林浴が健康に良いと持て囃される様になりました。確かに、都会の雑踏を逃れて、森林の中に入ると清々しい気分になります。清々しい気分になれるのは、木々の葉が光合成をして、空気中の炭酸ガスを吸い込み、酸素を吐き出しているから、空気が新鮮で奇麗であるという事が一つの理由です。そして、もう一つ理由があります。あの森林独特の香りが、神経を鎮めたり、体の新陳代謝を高めると言われています。現代はやりのアロマテラピーですね。あの「森林特有の香り」をフィトンチッドと呼びますが、それらの作用で生体への有用な作用が期待されます。森林での癒し効果は「森林セラピー」で注目されているのは皆様ご存知のことと思います。

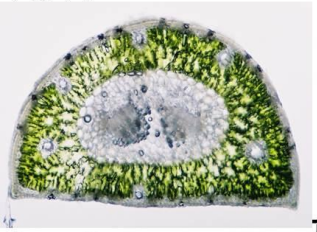
松寿仙にはアカマツ葉だけが使われます。アカマツとクロマツの違いは幹の色や葉の長さ・葉の柔らかさ・樹皮の亀裂の深さでも容易に見分けられますが、決定的な違いは葉の横断面で見分けます。これは横断面図ですが、中心部に二つの維管束をもつのは共通しています。樹脂道をみますとアカマツは、葉の表面に接していますが、クロマツは、葉肉の中にあります。アカマツかクロマツか良く解らないマツも多く見受けられます。地方によって呼び方が違い、アイノコマツとかアイグロマツ、アカグロマツと呼ばれるマツで、まさにアカマツとクロマツの中間種で、樹脂道は表面にも葉肉の中にもあります。

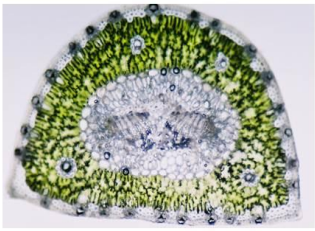
（医薬品原料　アカマツ葉の採取）

アカマツ葉採取は現在、主に浅間山麓の国有林で行わせていただいております。浅間山は、群馬県と長野県の県境に位置しますが、山麓の長野県御代田町の浅間山国有林内が採取地であります。標高1,000メートル以上の高地であり、夏の最も暑い時期でも２８℃を超えることはないとのことです。採取地は見渡す限りのアカマツ林で、夏は涼しく空気がとても澄んでいて、大変気持ちの良いところであります。松寿仙の原料となるアカマツ葉は、このような環境で育ったものが使用されていますが、森林整備の為に、間伐整備で伐倒されたアカマツの葉を採取させていただいております。密に植林された木々は、歳を重ねるに従って枝を伸ばし、隣の枝と押し合ってお互いに成長を妨げてしまいます。人の手が入らない山は、光が入らないため鬱蒼としています。間伐をすることによって光が差し込み、木の成長を助けると共に、他の植物とも共生して鳥や動物たちの餌も豊富に実ります。昔の人の話では、お




アカマツ


クロマツ


アイグロマツ

アカマツとクロマツの比較図

米を炊くのもお風呂を沸かすのも、山から集めてきた焚き木を燃料にして生活をしてきたそうです。ですから、昔は山がきれいだったそうです。山は人が手をかけてこそ元気になります。そして私たちが採取しているアカマツ葉は、人々の健康維持の薬となって生まれ変わるのです。当社の社員は、この自然からの恩恵、森林からの恵みに感謝し、いつも手を合わせて居ります。

ただ、近年ではマツクイムシの被害等で赤松林が減ってきてしまっています。そこで㈱和漢薬研究所では数年前から苗木を育てて医薬品の原料を収穫する事業を始めました。種まきから約２年半で収穫できます。

ここで、松寿仙ができるまでを約１５分で編集したビデオを上映させていただきます。

実は平成２３年の東日本大震災、福島原発の事故の際には原料として採取した赤松葉が使えなくなってしまいました。原発の事故は３月１２日でした。私達が赤松葉を調達したのは７月で、その時点では特別な基準が出ていませんでしたので食品に適用されていた放射性物質の暫定基準を下回っていることを確認して赤松葉を採取しました。さぁ、この赤松葉エキスで松寿仙を造ろう！、となった１１月に厚生労働省から突然、東日本１７都県で採取した生薬、放射性物質があろうがあるまいが、医薬品を製造してはならぬ、もし製造してしまい市場に出たものは全て自主回収せよ！という厳しいお達しが発出されました。さぁ、大変！私達は林野庁・中部森林管理局からのご指導をいただいて１７都県外の愛知県・岐阜県で赤松葉を集めることになりました。チェンソー等使ったことのない社員が急遽、講習会を受けて慣れない山林内での作業を行いました。今日、お集まりの皆様からは笑われてしまいそうですが、その時のドキュメンタリーをビデオにまとめてあります。撮影・編集・ナレーション全て素人の社員がつくったビデオをご覧ください。

４．薬草の自社栽培の取り組み

松寿仙の原料調達に関しましてはただ今ご覧いただきました様にクマザサ葉、アカマツ葉は１００％国内で調達できますが、その他の原料生薬はほとんど輸入に頼らざるを得ません。㈱和漢薬研究所では、ただいま紹介致しました松寿仙の他に漢方薬や和漢薬を９種類、製造販売しております。

原料生薬の調達に関しては中国の事情が絡んで大変難しい情勢が続いております。

日本の現状
- 原料生薬を海外に依存し過ぎ　国内自給率12％
- 主輸出国(中国；輸入量の7割)の情勢が不安定
- 生薬資源の枯渇化という理由で
  輸出制限(例；カンゾウ・マオウ)
- 漢方・生薬製剤市場の拡大⇒06～11年の5年間で
  漢方製剤市場（医療用・一般用）は1.16倍に拡大
- 生薬価格の高騰⇒06～10年の4年間で平均6割上昇。
  3～4倍上昇した生薬も・・・
- 国内栽培技術が伝承されないため消滅の危機

当社で製造販売している薬を例に上げて薬草栽培の取り組みを紹介させていただきます。この薬、名前は紫華栄、シカロンと読みますが、心身の疲労、冷え症、血色不良、胃腸虚弱、胃腸虚弱などに優れた効果をあらわす滋養強壮剤です。８種類の生薬の混合製剤、顆粒です。

幾つかの薬草の自社栽培を紹介します。シコンはムラサキの根を乾燥したものです。根がむらさき色をしています。昔は日本にも山野に自生していた植物ですが、医薬品原料以外でも染料として珍重され、採り尽くされてしまったと言われています。また、農薬の影響や農地の区画整理の影響などで自生は減多に見ることが出来ず、今はレッドリストの絶滅危惧種に指定されております。

栽培するとなると非常にデリケートな植物で、㈱和漢薬研究所・薬草栽培課で平成 17 年(2005 年)から本格的に試験栽培を開始し、発芽試験等で幾多の難しい経験を乗り越えて平成 23 年(2011 年)に「ムラサキ栽培方法」の特許を取得するに至りました。

ムラサキは発芽させるのが難しいことに加え、発芽後も非常にデリケートな植物です。高温多湿に弱く、特に暖地では栽培が難しいとされております。風通しや水はけを良くして育てないと、根腐されを起こしたり、病害が発生してしまいますので、逐一目を配っていかなければならず、日々の管理が非常に重要です。

もうひとつ薬草栽培の取り組みを紹介させていただきます。トウキはセリ科の多年草、特有の香りを放つ薬草で、その根が婦人病疾患等に処方されます。春、或いは秋に苗床に種子を蒔いて育てます。冬期、地上部は枯れますが翌春発芽し、６月頃には２０～３０センチほどの大きさになり、花期（６月中旬から８月初旬）には白い可愛らしい花を咲かせます。但し、生薬原料として使う為には花を咲かせてはいけません。薬用部位の根に十分な有効成分が貯蔵されないからです。栽培地では収穫用（原料用）のトウキと種子採取用のトウキを分けて栽培､種子採取用は３年間を要します。

以上、㈱和漢薬研究所では日本の気候に適した薬用植物の自社栽培に取り組んでおります。オウギ、オウゴン、シャクヤク等も栽培しております。

５．企業の社会貢献

以上の様に、森林を中心とする豊かな自然の恵みをいただいて生産活動を営む企業でありますことから、「自然の生命力を生かした自然薬をもって社会に貢献し、万人の健康に寄与しよう」を創業の理念として守り、社員一人一人が自然を守る使命と責任を自覚し、その日々の業務に取り組んでおります。

（法人の森林ー「自然薬グループ長寿の森林」づくりへの取り組み）

当企業グループでは、林野庁の「法人の森林制度」を利用して、全国３ヶ所で合計２６９ヘクタールの森林づくりに取り組んでおります。

この森林づくりは

※森林資源の造成を図り、国土の保全や生活環境の安全を守ること

※国民の健康増進、保健増進そして保養の場として、皆様が健康への気づきを体験することにより、生活習慣病を予防する一助としていただくこと

※自然薬服用者を含めた自然薬グループの皆様のふれあいの場として活用していただくこと　等

これらの目的で「自然薬グループ長寿の森林」と命名して、広く一般に開放して、健康増進、保健増進そして保養の場として利用していただくため、森林づくりを計画的に進めています。

自然薬グループ長寿の森林群馬

「自然薬グループ長寿の森林」の森林づくりに着手して以来、二十年余にわたり、歩道、駐車場、案内標識・案内板等の設置、休憩舎の設置、枯損木除去、大径木の保全、天然更新の誘導等の森林づくりに取り組んでまいりました。

３ヶ所の「自然薬グループ長寿の森林」は、歩道等の森林づくりが進んだことや森林の四季折々の変化が鮮やかなこともあって、多くの方々が森林を体感する場として利用しており、また地域の小学生の森林学習の場として利用されております。

また、当企業グループでは自然薬取扱薬局・薬店や自然薬服用者等を募り「自然薬グループ長寿の森林」を研修の場として、また、当企業グループの主製品である「松寿仙」愛飲者の集いなどのイベントの場としても利用しております。森林インストラクターを講師として、自然薬のみなもとである森林について学び、豊かな自然を体感していただいております。この森林の体感をもとに後述する全国の自然薬取扱薬局・薬店による緑の募金活動につなげていくよう努めております。当企業グループが企画した研修やイベントで「自然薬グループ長寿の森林」を利用した件数、参加者数は統計を取り始めた平成１５年度以来、９年間で２２２件、４，４１７人となっております（表－１）。

（東南アジアの植林活動援助）

地球温暖化など地球環境問題が深刻化している中で、熱帯林をはじめとする地球上の森林を持続的に維持・経営していくことは、今や世界的に重要な課題となっています。

当企業グループでは、国内の森林整備推進のみならず、(公財)国際緑化推進センターの活動にも協賛し、マレーシア、ミヤンマー、ベトナム、インドネシアなどの東南アジアにおいて植林援助を実施しております。

１９９５年から開始し、現在まで２２年間にわたり、約３００ヘクタール以上の森林を「和漢薬の森」、「カポニーの森」として造成しております。（表―２）

表－１　自然薬グループ長寿の森林　利用者数（平成 15～平成 28 年度）

場所	長寿の森林・長野		長寿の森林・群馬		長寿の森林・十和田		３箇所合計	
内訳	件数	体験者数	件数	体験者数	件数	体験者数	件数	体験者数
合計	125	2, 267	34	543	63	1, 607	222	4, 417 人

※自然薬グループ長寿の森林でのイベントや散策での利用者数を示しました。この統計は自然薬グループで企画し、森林インストラクター等の案内が行なわれたイベントに関する体験者数です。尚、一般にも開放していますので自由散策者の数は含まれておりません。

表－２　（公財）国際緑化推進センターを通しての海外植林援助

造林年	面　積	国、地名	造林年	面　積	国、地名
1995	2ha	マレーシア・サバ州	2007	１２ha	インドネシア･西スマトラ島
1996	2ha	マレーシア・サバ州	2008	１４ha	インドネシア･西スマトラ島
1997	5ha	マレーシア・サバ州	2009	２０ha	インドネシア･西スマトラ島
1998	１０ha	ミャンマー・ニャンウー	2009	１２０ha	ミャンマー・ニャンウー 他の寄付者との共同プロジェクト カバニ･コミュニティフォレスト造成プロジェクト
1999	１０ha	ミャンマー・ニャンウー	2010		
2000	１０ha	ミャンマー・ニャンウー	2011		
2001	１０ha	ベトナム林業大学	2012		
2002	１０ha	インドネシア･ロンボク島	2013	９０ha	ミャンマー・ニャンウー 他の寄付者との共同プロジェクト チャウカン･コミュニティフォレスト造成プロジェクト
2003	１０ha	インドネシア･ロンボク島	2014		
2004	記念植樹	ミャンマー･ニャンウー	2015		
2005	３０ha	インドネシア･西スマトラ島	2016		予　定 ミャンマー・ニャンウー
2006	２０ha	インドネシア･西スマトラ島	2017		

（「緑の募金」の一環）

『自然薬グループ長寿の森林募金』への取組み

当企業グループは森林を中心とする豊かな自然の恵みをいただいて営む企業であることから､自然を守り、森林づくりを支援していくため､「緑の募金」活動に取り組んでおります。「緑の募金」は「自然薬グループ長寿の森林募金」として取り組むこととし、全国の自然薬取扱薬局・薬店の店頭で募金活動を行っています。

また、「自然薬グループ長寿の森林募金」は、「緑の募金」に寄附され、(公社)国土緑化推進機構を通して森林づくりに生かされています。

募金箱は全国の取扱薬局・薬店３２７店の店頭に

自然薬取扱薬局・薬店では、募金箱を店頭に置き、来店のお客様に対して「自然薬グループ長寿の森林募金」設立の意義、豊かな森林の恵み、森林づくりの重要性などを説明し、募金活動を行っています。店頭に持ち込まれる募金には小さい子供さんの貯金箱まであり､思わず心が温かくなります｡当企業グループでは、募金をさらに進めるため、自然薬取扱薬局・薬店の全国大会において、募金のピーアールを、毎年、重点的に取組んでおります。

現在、募金箱を店頭に置いてある自然薬取扱薬局・薬店は全国で３２７店であり、今後、自然薬取扱薬局・薬店に対して募金の趣旨に賛同していただき、さらに募金箱を置く薬局・薬店を増やしいくこととしております。

募金は１６年間継続中､総額６８，６４８千円

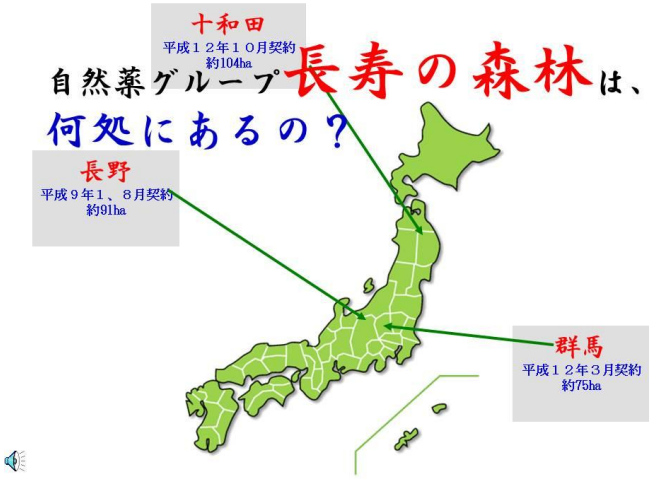
「自然薬グループ長寿の森林募金」は平成１３年から始まり、１７年経過しましたが、今後さらに多くの方々に募金していただくよう努めております。

現在までの募金額の推移は、表―４のとおりです。平成２８年１１月現在までの募金総額 68,686 千円余です。

表―３　自然薬グループ長寿の森林募金一覧（平成 13 年９月～平成 28 年３月）　　単位：円

年　度	平成１３年度	平成１４年度	平成１５年度	平成１６年度	平成１７年度	平成１８年度	平成１９年度	平成２０年度	平成２１年度
募金額	3, 996, 364	3, 963, 466	4, 195, 902	4, 294, 096	4, 342, 409	4, 659, 836	4, 848, 494	4, 530, 817	4, 672, 546
年　度	平成２２年度	平成２３年度	平成２４年度	平成２５年度	平成２６年度	平成２７年度	平成２８年度（上期）	総　額 ¥68, 686, 811	
募金額	4, 499, 706	4, 567, 690	4, 707, 146	4, 501, 481	4, 509, 448	4, 359, 259	2, 038, 151		

表－４　　自然薬グループ長寿の森林の環境貢献度（平成 27 年度、林野庁試算資料）

測定項目	評価項目	年間効果評価額	物量	参考値
水源かん養便益	洪水防止便益	１５，４５５千円	6, 055. 8m^3/sec	2リットルペットボトル 60, 655, 720 本
	流域貯水便益	３，９９５千円	121. 312m^3	
	水源浄化便益	８，３２２千円	121. 312m^3	
山地保全便益	土砂流出防止便益	１９，３６７千円	3, 459m^3	10t ﾀﾞﾝﾌﾟ ６２９台
環境保全便益	炭素固定便益	４，０６５千円	672. 4CO2 トン	ヒト※　2, 101 人

総合計評価額　５１，２０４千円　※：ヒト一人が１年間に排出するCO2 量に換算